

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき
～実のなる一重の山吹、実のならない八重の山吹～

64回（昭和32年卒） 渡部 功

1 太田道灌に関する故事

室町時代後期に活躍した武将太田道灌は、ある日、鷹狩に出かけました。ところが急に雨に見舞われ、近くの粗末な小屋で蓑を借りようとしたところ、中から若い娘が出てきて、黙って山吹の花の一枝を道灌に差し出しました。道灌は花を求めたのではないのにと、娘の真意を理解せず怒って立ち去りました。

後でこのことを家臣に話すと、それは、「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞあやしき」という古歌を踏まえたもので、娘は貧乏で道灌様にお貸しする蓑一つもございませんということ、山吹に託して告げたのだと答えました。これを聞いた道灌は自らの無学を恥じ、それ以来和歌に精進し、立派な歌人になったと言われています。



八重の山吹

道灌に関する以上の故事は、私もよく知るところですが、吉海直人（よしかいなおと）同志社女子大学教授のエッセイ『実のならない八重山吹』によると、この話は湯浅常山（ゆあさじょうざん）【注1】の『常山紀談』に掲載されている話で、江戸時代には教訓説話として人口に膾炙されていたものだという事を知り、更に、このことは「太田道灌借蓑図」と絵画化されており、浮世絵の題材にもなっているとのこと。また、この絵には、大槻磐溪【注2】作とされる以下のような漢詩（七言絶句）が添えられていることも知りました。

弧鞍衝雨叩茅茨
少女為遣花一枝
少女不言花不言
英雄心緒亂如絲

弧鞍（こあん）雨を衝いて茅茨（ぼうし）を叩く
少女為遣（おく）る花一枝（いっし）
少女は言はず花語らず
英雄の心緒（しんしょ）亂（乱）れて絲（糸）の如し

【注1】 江戸時代中期の岡山藩士。歴史や漢詩、武芸に通じた。24歳で家督を継ぎ、翌年藩命で江戸に出た際、荻生徂徠の門人である服部南部に入門する。岡山に戻ったのち、池田継政から3代の藩主に使え、寺社奉行や町奉行を勤めたが、直言が藩政批判と看做（みな）されて隠居を命じられ、以後著述に専念した。『常山紀談』は戦国時代の忠臣や勇者の事跡や逸話を描いたもの。

【注2】 江戸時代後期から幕末にかけて活躍した漢学者で文章家としても名高い。仙台藩の明倫養賢堂学頭であった磐溪は、幕末の仙台藩論客として奥羽越列藩同盟の結成に走り、戊辰戦争後は戦犯として謹慎幽閉されたが、後に江戸で静かに余生を送った。

2 兼明（かねあきら）親王（醍醐天皇皇子）の歌

先に掲げた古歌は、『後拾遺集（ごしゅういしゅう）』【注】にある兼明親王の歌で、その歌には次に示すような長い詞書があります。

小倉の家に住み侍りけるころ、雨の降りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍りけり。心も得でまかりすぎて、またの日山吹の心得ざりしよし言ひにをこせて侍りける返しに言ひ

つかはしける

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞあやしき（後拾遺集 1155 番）

【注】 八代集の第四『拾遺集』の後継たるべく編まれた勅撰和歌集。勅命は白河天皇、撰者は藤原通俊。承保 2（1075）年奉勅、応徳 3（1086）年完成。20 巻で総和歌数 1218 首ある。



一重の山吹

つまり、「京都嵯峨野の小倉の別荘に居たとき、蓑を借りに来た人がいたので、山吹の枝を渡してやった。翌日その人が、その意味が理解できなかつたと聞いてきたので、この歌を詠んで渡した」のです。歌の意味は、「七重咲き八重咲きと、山吹の花が奇麗に咲いている屋敷だが、その山吹には実の一つも出来ないように、この屋敷には蓑一つないんだから悲しいよ」ということで、つまり、なぜなぞの答えだったのでした。

3 古典落語の「道灌」

道灌に関する故事として、江戸発祥の古典落語があることを知りました。若手が鍛錬のために演じる、いわゆる「前座噺」の一つだそうです。そのあらすじは次のようなものです。

「岩田の御隠居」宅に遊びに来た八五郎は、隠居に複数の絵を貼った「張りませ」の屏風を見せてもらいます。そして、八五郎は絵の一つについて、「シイタケの親方みたいな帽子を被って、虎の皮の股引を履いて突っ立っているのはだれかと問います。その絵は、太田道灌の「山吹の里」を描いたものでした。以下、隠居は、道灌に関する逸話を八五郎に語ります。これを聞いた八五郎は、「うちにもよく傘を借りに来る男がいる。ひとつその歌（七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき）で追っ払ってやろうと思いつき、歌を仮名文字で隠居に書いてもらい帰宅します。

ほどなくして、雨が降り出し、その男が八五郎宅に飛び込んできますが、男はすでに傘を持っており、「提灯を貸してほしい」と八五郎に頼みます。困った八五郎は、男に対して「雨具を貸してくださいと言えば、提灯を貸してやろう。」と言います。男は仕方なく「雨具を貸してくれ」と言いますと、八五郎は、道灌の真似をして娘の役を演じ、「お恥ずかしゅうございます」といいつつご隠居に歌を仮名文字で書いてもらった和歌を差し出しました。男はそれを「ななへやへ、はなはさけども、やまぶしの、みそひとだと、なべとかましき」とつかえながら読み、「短い都都逸だな」と感想を述べます。そこで、八五郎が、「都都逸？お前よっぽど歌道が暗いなあ」とからかうと、男は、「かど（角）が暗いから、だから提灯を借りに来たんだ」と返しました（これがこの落語の落ちです。）。

4 一重のヤマブキ、八重のヤマブキ

ところで山吹は、バラ科ヤマブキ属の落葉低木で晩春に黄金色の花をつけます。低山の明るい林の木陰などに群生する樹木ですが、茎は細く、柔らかく、背丈は1メートルからせいぜい2メートルです。また、立ち上がりますが、先端はやや傾き、往々にして山腹では麓側に垂れています。地下に茎を横に伸ばし、群生します。

春、花の季節、山形市の市街地から西蔵王に向かう山形県道 53 号の岩波地区の竜山川沿いの道路沿線では、道路沿の法面一面がこの山吹に彩られ、黄金色に輝く絶景を鑑賞することができます。

兼明親王の歌から想像すると、山吹には実がならないように思われますが、実は、山吹には一重と八重の花があり、一重のものには立派に実が付きますが、一方、八重咲きものは不稔花です。これは、一重咲きものは、5本余の雌蕊と沢山の雄蕊があるのですが、八重咲き花の方は、花びらしか見当たらず、雄蕊も雌蕊もありません、これが原因で八重咲きものは不稔となるようです。つまり、雄蕊が花卉に変化し、雌蕊も退化したので、従って、八重の花は結実せず、実生繁殖が不可能で、挿し木、取り木などの栄養繁殖でしか増やせないことになります。なぜこのような現象が生じるのか、調べてみたのですが、よく

わかりませんでした。なお、白花の「シロヤマブキ」は、ヤマブキ、八重ヤマブキとは異なる属です【注】。

【注】 生物を自然界における類系関係に従って分類する「自然分類」(系統分類)においては、共通の性質を持っているが、「種」の違うものを集めて「属」とし、属を纏めて「科」、更に、「目」・「綱」・「門」と大きく纏める。

バラ目ーバラ科ーヤマブキ属ーヤマブキ(種),バラ目ーバラ科ーヤマブキ属ーヤエヤマブキ(種)
バラ目ーバラ科ーシロヤマブキ属ーシロヤマブキ(種)

5 万葉集にあるヤマブキ

ちなみに万葉集に山吹の歌が詠まれているかどうかを『萬葉集釋注』(伊藤 博著)で調べてみたところ、詠み人不詳で次のような歌があることがわかりましたが、このような歌が詠まれたということは、万葉人にとっても、八重咲き花の方には実が付かないことがわかっていたのです。

花咲きて 実はならねども 長き日に 思(おも)ほゆるかも 山吹の花(万葉集 10 卷 1860 番)

【花は咲くだけで実はならないとは知っていたのですが、咲く日までは日数長く思われてしかたがないのです。山吹の花は。】

6 『NHK ラジオ深夜便 誕生日の花と短歌 365 日』にみるヤマブキ

本県遊佐町出身の鳥海昭子さんは、『ラジオ深夜便誕生日の花と短歌 365 日』で、4月20日の花としてのヤマブキについて、次のように詠んでいます。

時を待ち人待つことのかすかなる風にならずく山吹の花

【「待つこと」にはかすかな期待と不安があるものです。ヤマブキの花が、心地よい春風にうなづくように揺れていました。太田道灌の故事でも知られた花ですね。】